

981116 (eigashi)

参考資料

参考資料1

1 日本におけるスポーツ映像の歴史

我が国におけるスポーツ映像の歴史は、結論的にいってほとんど調べられていないのが実状である。清水(1989)による野球映画のレビューが例外的に見られるが、これとても野球という特定の種目に限定されたものである。ここでは先ず、我が国における活動写真の黎明期を概観した後で、スポーツが映像としてスクリーンに映し出されていった歴史を振り返っておくことにする。

1.1 活動写真の渡来期

日本に動く映像、いわゆる活動写真 motion picture が持ち込まれ、一般に公開されたのは 1896(M.29)年のことである。これはエジソンがキネトスコープ kinetoscope を発明した、その僅か 2 年後の事である。塚田(1980)によれば、1896(M.29)年 12 月 8 日付の『時事新報』に次のような記事が載り、これが渡来の事実確認の証拠とされている。「米国のエジソン氏が電気の作用を以て写真を活動せしむる機械を発明せる趣は嘗て本紙上に記すところありしが此新機械は先頃神戸の神港倶楽部に着し目下公衆の観覧に供し居る由にて…」(p.13)。当時はこのキネトスコープは「のぞき眼鏡式活動写真」と呼ばれていた(p.13)。つまり 1 人用であったのである。塚田は活動写真説明書を付録として収録しており、その中に 1897(M.30)年に赤坂離宮御花殿にて皇太子殿下の天覧があり皇族や華族も観覧したという記述が見られる。このキネトスコープによってこの時代観られた映像の中には、「学校運動の光景」「米国最大海水浴場の光景」などが含まれていたとされる(塚田, 1980, pp.288-306)。このようにして、エジソンのキネトスコープによって、日本で初めて動く人間の姿やスポーツおよびレクリエーションの映像が人々に公開されたのである。

塚田(1980)によれば、1897(M.30)年には早くも 2 種類のスクリーン映写式活動写真が日本に輸入され、公開されている。その 2 種類の活動写真とは、エジソンがのぞき眼鏡式を改良したヴァイタスコープ vitascope とフランスのリュミエール Lumiere 兄弟が発明したシネマトグラフ cinematograph である。シネマトグラフは当時は自動写真とも呼ばれており、

稲畑勝太郎が輸入し、1897(M.30)年 2月 15日から大阪南地演舞場でジレール Girel, François-Constant というフランス人技師の手によって公開されたとされる(p.95)。このジレールという人はパールというカメラマンとともに日本の各地を撮影して回り、フランスに「明治の日本」と題した映像を送っていたことは有名な話である。同年 2月 22日から荒木和一が輸入したヴァイタスコープがやはり大阪の新町演舞場で公開されている。このヴァイタスコープは写真幻灯蓄動機と呼ばれていた(p.171)。シネマトグラフが関東で初めて公開されたのは、1897(M.30)年 3月 9日に吉沢商会がイタリア人ブラッキアリーニ Braccialini, Giovanni から購入したものを横浜の港座で公開した時のことであるとされる(pp.247-253)。同年 3月 26日から東京に進出し、神田の錦輝館で公開された。その時の広告には「活動大写真」という表現が見られる(pp.226 - 227)。ヴァイタスコープの方は、同年 3月 6日に新居商会がアメリカから輸入し、やはり同じ神田の錦輝館で技師クローズ Krous, Daniel Grim の手によって公開されたのが端緒であるとされる。この事実からすれば、関西の方が関東よりも物見高かったといえよう。

こうして、1896-97年の間に日本に上陸した活動写真は大人気を博して全国に広まっていったのである。しかしながら、エジソン方式は撮影が大変だったこともあってリュミエールのシネマトグラフが次第に世界を制覇していき、日本でもシネマトグラフが映画界を支配していくことになったのである。その後、日本においてスポーツがこのシネマトグラフによってどのように映像化されていたかを概観しておきたい。

1.2 日本におけるスポーツ映像：戦前期

日本におけるスポーツ映像に関するまとまった映像研究がみられないため、ここでは、佐藤忠男(1995)の日本映画史研究および原・長瀧(1995)の日本喜劇映画史の研究を中心に、冬門・柚木(1994)および田沼(1996)らの野球映画批評を参照し、さらにはビデオガイドで補完しながら日本スポーツ映像のフィルモグラフィーを作成してみた(注 1)。そのフィルモグラフィーを中心にスポーツ映像の作成状況を概観しておく。

佐藤の日本映画史によると、1908年頃から日本でも劇映画が作成されるようになった(佐藤忠男, 1995, 第1巻 p.7)。当時は日本独特の弁士とオーケストラがついていたことは有名な話である。日本映画の草分け時代の1910年代から20年代にかけては映画の原作に講談本が多く使われ、歌舞伎、講談、新派劇などを題材にしていたとされる(第1巻

pp.19-50)。その後、1910年代、20年代のアメリカ・ハリウッドの巨匠たちの映画に大きく影響されてくる(第1巻 pp.51-52)。あの日本映画の巨匠小津安二郎監督も、若き日にはアメリカのカレッジ・コメディに大きく影響され、アメリカ映画タッチの大学生シリーズ(無声映画)を数本制作している。その典型が『若き日』(小津安二郎監督, 1929)である。

原・長瀧(1995)によると、ロイドやキートンといったアメリカ製学生スポーツ映画(注2)に影響され、日本でも1921(T.10)年頃から学生スポーツ映画が作成され始めた(とされる(pp.55-56))。当初は、野球、ラグビー、水泳などであったが、その後ボート、陸上競技、オートバイ、スキー、ボクシング、相撲、柔道など多様なスポーツが映画に取り上げられるようになり、大学出の本物のスポーツ万能選手が起用されたといわれる。1924(T.13)年に鈴木傳明主演の『我等の若き日』がヒットして日本の学生スポーツ映画に流行をもたらしたとされる(p.55)。当時、この学生スポーツ映画は毎年5, 6本が制作され、1928(S.3)年には年間10本もの映画が制作されていたのである(p.55)。

この時期には、学生スポーツの喜劇映画もヒットした(原・長瀧, 1995, p.56)。その先駆けは1923(T.12)年の『お父さん』(島津保次郎監督)と1929(S.4)年『若き日』(小津安二郎監督)であるとされる。藤井貢主演の「若旦那」シリーズ第1作である『大学の若旦那』(清水宏監督, 1933年)は、ロイド喜劇に影響された(とされ、大学のラグビーの花形選手のプレイボーイぶりを喜劇にしたものであった。これは6本シリーズ作られ、1961(S.36)年より制作される加山雄三主演「若大将」シリーズの原型となる系譜であるとされている(原・長瀧, 1995, p.56)。

上記のように、この時代の無声映画は大学スポーツおよび喜劇映画という組み合わせでヒットしていたことが窺い知れる。これが当時のアメリカ映画の影響であると、原・長瀧および佐藤の双方の映画史において認められている。中でも、鈴木傳明という明治大学出身のスポーツ万能選手と田中絹代が主演した『陸の王者』(牛原虚彦監督, 1928)が学生スポーツもののメロドラマのはしりであり、有名な作品とされている。この映画の監督牛島は1926年に渡米し、C.チャップリンの撮影所で見習い生活を送ってきており、健全なアメリカニズムを日本に輸入したと言われている(佐藤忠男, 1995, 第1巻 p.221)。小津安二郎監督のソフィスケートされた大学生喜劇映画のアメリカニズムと共に、ハイカラでモダンなものが受けた時代であったことが窺われ、それにスポーツマンが利用されていたという事実が確認できる。

また、この時期のもう一つの柱が野球映画である。1926年に神宮球場が完成し、大学野球が大人気を博した時代を迎えていた。その影響を受けて1928-30年の間に大学野球を題材にした野球映画6作品（サイレント映画）が制作されている（田沼, 1996, p.366）。1930年代には14本もの野球映画が制作されており、この時期の大学野球、中等学校野球、そしてプロ野球の人気ぶりが窺い知れる。中でも「野球道」の推奨者である飛田穂州原作の『魂を投げろ』（田口哲監督, 1935）という野球映画があることも特筆に値する。

その他のスポーツ映像としては、相撲映画があり、特に長谷川伸の戯曲で5回も作品化された『一本刀土俵入り』が特筆に値する。1931(S.6)年、無声映画末期に稲垣浩監督、片岡千恵蔵主演のものが名作とされている（佐藤忠男, 1995, 第1巻 p.293/ p.337.）。この映画は、戦前では1934(S.9)年にも長谷川一夫主演で映画化されている（注3）。その他、相撲映画としては、1944(S.19)年に『土俵祭』（丸根賛太郎監督、片岡千恵蔵主演）という作品が公開されている。

1.3 日本におけるスポーツ映像：戦後期－現代

敗戦後の日本の映画界は、GHQによる占領下で映画の統制も進められた（佐藤忠男, 1995, 第2巻 pp.163-182）。当時は民主主義を啓蒙する映画が推奨されたが、やはり喜劇ものが人気を博したのである。暗い戦後の世相を吹き飛ばすような雰囲気作りに映画が一役買ったといえよう。1945(S.20)年敗戦の年の暮れには、『東京五人男』（斉藤寅次郎監督、エンタツ、アチャコ、ロッパなど主演）というドタバタ喜劇映画が、敗戦後の混乱した東京の闇市を舞台にギャグで笑い飛ばし、大人気を博したとされる（佐藤忠男, 1995, 第2巻 pp.171-172）。

戦後初期のスポーツ喜劇映画では、シミキン（清水金一）の松竹喜劇映画がこの系統に属す。シミキンは1946(S.21)年にエノケン（榎本健一）と『幸運の仲間』（佐伯清監督）で共演し、同年に松竹と専属契約する。『金ちゃんのマラソン選手』（原研吉監督, 1946）を皮切りに約3年半で14作品に出演しているが、その内4作がスポーツ喜劇映画である。『シミキンの拳闘王』（佐々木啓祐監督, 1948）、『シミキンのスポーツ王』（川島雄三監督, 1949）、『無敵競輪王』（西村元男監督, 1950）がそれである。（以上、原・長瀧, 1995, pp.114-127）

敗戦後の日本に活力を与えたのは喜劇映画だけではなくプロ野球のスター達のプレーで

もあった。そのため戦後初の野球映画である『二死満塁』（田口哲監督、1946）に続き『のんきな父さん』（マキノ正博監督、1946）には主演の灰田勝彦の他に別所毅彦、川上哲治らのプロ野球選手も出演している（田沼、1996、pp.306-309）。また、この時期にはエノケン（榎本健一）が野球の喜劇映画を作っている。1947(S.22)年の『エノケンのホームラン王』（渡辺邦男監督）がそれであるが、この映画にも当時の巨人軍監督三原脩、川上哲治など、巨人軍の選手が総出演している（原・長瀧、1995、p.120）。

このようにプロ野球を題材にした映画はこの後も制作されていくことになる。『男ありて』（丸山誠治監督、1955）は志村喬が引退間際のプロ野球監督の人生の黄昏時の哀愁を演じた佳作とされている（佐藤忠男、1995、第2巻 p.274/ p.332）。また小林正樹監督の『あなた買います』（1956）では学生野球選手を奪い合うプロ野球のスカウトたちのドラマが描かれている（佐藤忠男、1995、第2巻 pp.293-294）。

1955年からは戦後日本の野球映画ブームが始まったと言われている（田沼、1996、p.279）。そのブームの火付け役が『不滅の熱球』（鈴木英夫監督、1955）であるが、これは沢村英治投手の半生を描いたものであった。この時期の小津安二郎の映画にも点景としてプロ野球が使われていることも、このようなプロ野球を題材にした時代の特徴の一つとして挙げられる。

さて、先に見た『一本刀土俵入り』は日本的な戯曲の再演としての映像化であるが、1950-1960年代のこの時期には大相撲の若の花、プロレスの力道山などのスターが伝記映画的に映像化されていく。このことによって、この時期の格闘技や勝負事への志向が見て取れるし、また戦後の復興期の盛り上がりを象徴するかのような映像化が人気を博したことが窺い知れる。

この後、日本におけるスポーツ映像は青春映画のジャンルとして映画化されていくことになる。まず石原裕次郎と赤木圭一郎というタフガイの青春ボクシング映画がこの端緒となった。1957(S.32)年の石原裕次郎主演の『勝利者』（井上梅次監督）と1960(S.35)年の赤木圭一郎主演の『打倒（ノックダウン）』（松尾昭典監督）がそれである。裕次郎シリーズものは反社会的な青春映画の一つとして知られるが、その題材としてボクシングが取り上げられていたことが窺える。当時、「太陽族」なる言葉も広まり、ヨットや水上スキーが青春のライフスタイルを飾る装置として取り上げられていたのである。ボクシングはその後青春映画の題材に取り上げられていく。『ボクサー』（寺山修司監督、1977）、『真夜中のボクサー』（高橋三千綱監督、1983）『どついたるねん』（阪本順治監督、

1989)などがそうである。

映像の題材として野球の使われ方には、この時期からは二つの方向に大きく分かれてきたといえる。一つは喜劇化の方向である。もう一つは青春のひたむきさやノスタルジア感を醸成するか、あるいは反社会的な青春像を描くかという方向である。前者には『ダイナマイトどんだん』（岡本喜八監督、1978）、『塀の中のプレーボール』（鈴木則文監督、1987)などが挙げられる。後者には、『瀬戸内少年野球団』（篠田正浩監督、1984）、『遙かなる甲子園』（大澤豊監督、1990)および『サード』（東陽一監督、永島敏行主演、1978)などが挙げられる。

青春のラブロマンスや若者文化の退廃ぶりを描いたスポーツ映像はその後も多く制作されている。中でもホイチョイ・プロダクション制作、馬場康夫監督の3部作『私をスキーに連れてって』（原田知世主演、1987）『彼女が水着に着がえたら』（原田知世主演、1989）『波の数だけだきしめて』（中山美穂主演、1991）という一連の映画は、スポーツ文化を若者中心に大きく変貌させるきっかけとなった作品群である。ユーミンやサザン・オールスターズという当時の人気歌手のポップ・サウンドをバックに、軽快なスポーツ・ライフやラブ・ストーリーが描かれたのである。しかしながら、これらは当時の若者達のスポーツの大流行を招くとともに、スポーツを悪しき方向に変質させる元凶ともなった映画群であったともいえる。このように、スポーツは映像化されることによって、一般大衆にそのイメージを流布し、スポーツ文化の変容と伝搬に対して非常に大きな要因となっていたのである。

若者の真摯な青春像を描き出すスポーツ映像群が見られる一方で、喜劇化される方向に向けてスポーツが題材として用いられる傾向は、現在でも続いているといえる。『シコふんじゃった』（周防正行監督、1992）という作品は日本映画界に新風を吹き込んだスポーツ喜劇映画として人気を博した。『プロゴルファー織部金次郎』（杉村六郎監督、1993）は日本の高度成長期のゴルフブームを背景にした作品シリーズであるが、スポーツ人情喜劇として根強い人気を保っている。

上記のように、スポーツは青春ものや喜劇ものとして映像化されていく一方で、スポーツの真摯な取り組みや真剣な生き方はドキュメンタリー映像としても記録されていくことになる。1950年代のプロレスや相撲の伝記物に続き、1977(S.52)年には『Big-1 物語 王貞治』（吉田喜重監督）という王貞治選手の756号のホームランを巡るドキュメンタリー映画が作成されている。1985(S.60)年には柔道の山下泰裕選手の少年時代を描いた『山下少

年物語』（松林宗恵監督，穴見潤也主演）が作成されている。このように、スポーツ界のヒーローたちは映像化され一般大衆の記憶にとどめられていったのである。また一方では、オリンピックにおける平和の祭典競技やナショナリズム、あるいは人間の普遍的なひたむきさや真摯な崇高性などが記録にとどめられていく。『東京オリンピック』（市川崑監督，1965）および『札幌オリンピック』（篠田正浩監督，1972）のようなオリンピック大会の公式記録映画がその典型である。

1.4 日本におけるスポーツ映像の様相

以上概観してきたように、日本においてスポーツは喜劇映画として扱われる傾向が見られるといえよう。この喜劇化されるスポーツの方向は、日本だけでなくアメリカ映画の影響を受け継いでおり、その両方の文化圏を視野に入れて第3章においてこの問題が扱われている。さらに、スポーツは大学生ものや青春映画として扱われることが多い傾向が見られるとまとめることができる。身体的な若さがスポーツの一つの特権としてみなされるため、青春ものや恋愛ものの題材にスポーツが利用されることが多いのは当然のことであったといえる。その他、プロ野球ものや伝記映画としてスポーツは大衆に公開され娯楽を提供してきた。その一方で、真摯なスポーツへの取り組みや普遍的な人間のひたむきさなどがドキュメンタリー映画として人々の記憶の中に保存されていく仕掛けとなっていたことが、上記の日本のスポーツ映画史から明らかであるといえよう。

注

注1. 日本スポーツ映画のフィルモグラフィー：冬門・柚木(1994)、佐藤(1995)、原・長瀧(1995)、田沼(1996)を中心に作成した。〈凡例:西暦年(元号年)『作品名』監督名、主演者名：簡単な内容〉

1923(T.12)『お父さん』島津保次郎監督，正邦宏・水谷八重子主演。

1924(T.13)『我等の若き日』鈴木健作監督，鈴木傳明主演：学生スポーツ映画の流行をもたらすヒット作。

1928(S.03)『陸の王者』牛島虚彦監督，鈴木傳明・田中絹代主演：万能スポーツ選手の鈴木。アメリカナイズされた映画スター。

1928(S.03)『熱球は飛ぶ』服部真砂雄監督，沢田義雄主演：大学野球。

1928(S.03)『大学選手』浅岡信夫監督，広瀬恒美主演：大学野球。

- 1929 (S.04) 『野球狂時代』井出錦之助監督、竹川巖主演：大学野球。
- 1929 (S.04) 『早慶戦時代』川波良太監督、中根龍太郎主演：大学野球。
- 1929 (S.04) 『若き日』小津安二郎監督、結城一郎・斉藤達雄主演：大学生たちの妙高高原のスキーライフ。小津のソフィスケイティッド・コメディ（ハイカラ、ダンディぶり）。
- 1930 (S.05) 『殊勲の本塁打』富沢進太郎監督、瀬良章太郎主演：大学野球。
- 1930 (S.05) 『若き血に燃ゆる者』木村恵吾監督、中野英治主演：大学野球。
- 1930 (S.05) 『特急本塁打』三上良二監督、根岸東一郎主演：社会人野球（1927年から都市対抗野球が始まった）。
- 1931 (S.06) 『一本刀土俵入り』稲垣宏浩監督、片岡千恵蔵主演：長谷川伸の戯曲で5回も作品化された初回作。
- 1931 (S.06) 『少年選手』徳永フランク監督、小林三夫主演：少年野球。
- 1931 (S.06) 『本塁打』熊谷久虎監督、尾上助三郎主演：少年野球。
- 1931 (S.06) 『学生街の花形』清水宏監督、藤井貢主演：剣道部員と野球部員の喧嘩。大学スポーツマンのバンカラぶり。
- 1933 (S.08) 『大学の若旦那』清水宏監督、藤井貢主演：大学ラグビーの花形選手のプレーボーイぶり。
- 1933 (S.08) 『応援団長の恋』野村浩将監督、岡譲二・田中絹代主演：トーキー映画。大学野球が背景に退き、応援団長が主人公。
- 1934 (S.09) 『凱歌の蔭に』佐々木恒次郎監督、江川宇礼雄主演：応援団長が主人公。
- 1934 (S.09) 『一本刀土俵入り』長谷川一夫主演。
- 1934 (S.09) 『スポーツの女王』孫愉監督：戦時中の植民地における反日映画風作品。
- 1935 (S.10) 『ああ玉杯に花うけて』上砂泰蔵監督、松尾文人主演：地方の中等学校野球を題材にする。
- 1935 (S.10) 『魂を投げろ』田口哲監督、中村英雄主演：地方の中等学校野球を題材。
- 1935 (S.10) 『王座目指して』上野真嗣監督、立松晃主演：大学野球。
- 1935 (S.10) 『新婚三塁打』斉藤寅次郎監督、小倉繁・出雲八重子主演：ナンセンス喜劇。
- 1937 (S.12) 『花形選手』清水宏監督、佐野周二主演：学生スポーツマンの軍事訓練と恋愛。戦時中の学生スポーツもの。
- 1937 (S.12) 『学生街の花形』吉村操監督、水島道太郎主演：プロ野球も扱われるが大学野球中心。
- 1939 (S.14) 『青春野球日記』渡辺邦男監督、月田一郎主演：極東軍という仮名のプロ野球球団。
- 1940 (S.15) 『秀子の応援団長』千葉泰樹監督、高峰秀子・千田是也・灰田勝彦主演：プロ野球選手も登場。灰田の歌でも応援。
- 1944 (S.19) 『土俵祭』丸根賛太郎監督、片岡千恵蔵主演：相撲映画。
- 1946 (S.21) 『二死満塁』田口哲監督、夏川大二郎主演：戦後初の野球映画。
- 1946 (S.21) 『のんきな父さん』マキノ正博監督、小杉勇・轟夕起子・灰田勝彦主演：別所毅彦、川上哲治らのプロ野球選手も出演。
- 1946 (S.21) 『金ちゃんのマラソン選手』原研吉監督、清水金一主演：シミキン・シリーズのスポーツ・コメディ。
- 1948 (S.23) 『シミキンの拳闘王』佐々木啓祐監督、清水金一主演：シミキン・シリーズのスポーツ・コメディ。

- 1948(S.23) 『エノケンのホームラン王』渡辺邦男監督、榎本健一主演：巨人軍三原脩監督、川上哲治ら巨人軍の選手総出演の喜劇。
- 1948(S.23) 『花嫁選手』小杉勇監督、高峰美枝子・大下弘主演：急映フライヤーズの選手達が出演。
- 1948(S.23) 『野球狂時代』斉藤寅次郎監督、杉狂児・沢村貞子主演：斉藤寅次郎監督の喜劇タッチの野球映画。
- 1949(S.24) 『シミキンのスポーツ王』川島雄三監督、清水金一主演：シミキン・シリーズのスポーツ・コメディ。
- 1949(S.24) 『ホームラン狂時代』小田基義監督、灰田勝彦主演。
- 1950(S.25) 『無敵競輪王』西村元男監督、清水金一主演：シミキン・シリーズのスポーツ・コメディ最終作。
- 1950(S.25) 『栄光への道』中村登監督、鶴田浩二・月丘夢路主演：大阪タイガース（阪神の前身）選手出演の感動ドラマ。
- 1951(S.26) 『憧れのホームラン王』長島豊次郎監督、佐田啓二主演：松竹ロビンスの小鶴誠選手が出演。
- 1951(S.26) 『歌う野球小僧』渡辺邦男監督、灰田勝彦・上原謙主演：学校推薦で視聴覚教材として動員がかかるほどの人気。野球が健全な時代の映画。
- 1952(S.27) 『栄冠涙あり』佐藤武監督、灰田勝彦主演：水原茂、別所毅彦、川上哲治ら読売ジャイアンツの選手が出演。
- 1954(S.29) 『一本刀土俵入り』片岡千恵蔵主演。
- 1954(S.29) 『やぐら太鼓』マキノ雅弘監督、二本柳寛主演。
- 1954(S.29) 『力道山の鉄腕巨人』並木鏡太郎監督：力道山が小児麻痺で立てない少年に同情してプロレスを見せる。
- 1955(S.30) 『力道山物語』森永健太郎監督：力道山の波乱の半生記のセミ・ドキュメンタリー映画。
- 1955(S.30) 『男ありて』丸山誠治監督、志村喬主演：プロ野球監督のドラマ。
- 1955(S.30) 『不滅の熱球』鈴木英夫監督、池部良・司葉子・千秋実・笠智衆主演：沢村英治投手の半生を描く。この後5年間の日本の野球映画ブームの火付け役となった映画。
- 1956(S.31) 『あなた買います』小林正樹監督、佐田啓二・岸恵子主演：プロ野球のスカウトたちの学生野球選手の奪い合い合戦。
- 1956(S.31) 『四人の誓い』田島恒夫監督、鶴田浩二・灰田勝彦・別所毅彦主演。
- 1956(S.31) 『若ノ花物語ー土俵の鬼』森永健太郎監督、若ノ花勝治の初代若ノ花の半生記のセミ・ドキュメンタリー映画。
- 1956(S.31) 『泣き笑い土俵入り』斉藤寅次郎監督、花菱アチャコ主演。
- 1957(S.32) 『勝利者』井上梅次監督、石原裕次郎主演：ボクシングのタフガイもの。裕次郎シリーズ。
- 1957(S.32) 『一本刀土俵入り』加東大介主演。
- 1957(S.32) 『川上哲治物語・背番号16』滝沢英輔監督、川上哲治・新珠三千代・宍戸錠主演。
- 1958(S.33) 『坊ちゃんの野球王』近江俊郎監督、高島忠男・古川緑波主演。
- 1958(S.33) 『おトラさんのホームラン』小田基義監督、柳家金語郎・有島一郎主演。
- 1959(S.34) 『鉄腕投手稲尾物語』本多猪四郎監督、稲尾和久・志村喬主演。
- 1959(S.34) 『一刀斎は背番号6』木村恵吾監督、菅原謙二主演。

- 1959(S.34)『東京の孤独』井上梅次監督，小林旭・穴戸錠主演。
- 1960(S.35)『一本刀土俵入り』長谷川一夫主演。
- 1964(S.39)『ミスタージャイアンツ 勝利の旗』佐伯幸三監督，長嶋茂雄・伴淳三郎・フランキー堺主演。
- 1965(S.40)『東京オリンピック』市川崑監督：1964年東京オリンピック大会公式記録映画。カンヌで国際批評家協会賞など受賞。
- 1968(S.43)『青春』市川崑監督：高校野球のドキュメンタリー映画。
- 1969(S.44)『打倒（ノックダウン）』松尾昭典監督，赤木圭一郎主演：プロボクシングに打ち込む青春映画。
- 1970(S.45)『サインはV』竹林進監督，中山仁・岡田可愛主演：青春女子バレーボール映画。
- 1971(S.46)『スバルタ教育 くたばれ親父』舛田利雄監督，石原裕次郎・若尾文子主演。
- 1971(S.46)『大学の若大将』加山雄三主演：若大将シリーズ開始。計11本制作。
- 1971(S.46)『片足のエース』池広一夫監督，高田直久・井川比佐志・宇野重吉主演：高校野球福岡大会での実話に基づいて。
- 1972(S.47)『札幌オリンピック』篠田正浩監督：1972年札幌冬季オリンピック大会公式記録映画。
- 1977(S.52)『Big-1 物語 王貞治』吉田喜重監督：王貞治選手の756号のホームランを巡ってドキュメンタリー映画。
- 1977(S.52)『野球狂の詩』加藤彰監督，木之内みどり主演：東京メッツにサウスポーの美少女投手水原勇気が入団。魔球を完成し救世主となる。
- 1977(S.52)『ボクサー』寺山修司監督，菅原文太主演：プロボクシングとうだつの上がないコーチのドラマ。
- 1977(S.52)『ドカベン』鈴木則文監督，橋本三智弘・永島敏行主演。
- 1978(S.53)『ダイナマイトどんどん』岡本喜八監督，北大路欣也主演：北九州のやくざが占領軍の指示で野球で決着をつけようという東映任侠映画のパロディ。
- 1978(S.53)『サード』東陽一監督，寺山修司脚本，永島敏行主演：元野球少年の不良少年が少年院で走り続ける。ゴールはない。社会的反抗の青春映画。
- 1979(S.54)『英霊たちの応援歌 最後の早慶戦』岡本喜八監督，永島敏行・勝野洋主演：最後の六大学野球と学徒出陣、特攻隊。
- 1983(S.58)『真夜中のボクサー』高橋三千綱監督，田中健・田中好子主演：シャドウボクシングで体づくりに専念。アンチ・ヒーローの青春像を描く。
- 1984(S.59)『瀬戸内少年野球団』篠田正浩監督，夏目雅子・郷ひろみ主演：敗戦後の子どもたちと進駐軍の野球のノスタルジア。
- 1985(S.60)『山下少年物語』松林宗恵監督，穴見潤也主演：柔道の山下泰裕の少年時代を描いた作品。
- 1987(S.62)『瀬戸内少年野球団（青春編）最後の楽園』三村晴彦監督，田原俊彦主演：『瀬戸内少年野球団』の続編青春映画。
- 1987(S.62)『ゴルフ夜明け前』松林宗恵監督，桂三枝主演：時代劇風コメディ。
- 1987(S.62)『塀の中のプレーボール』鈴木則文監督，草刈正雄主演：刑務所内で看守と囚人たちの野球をめぐる一触即発の大暴投喜劇。
- 1987(S.61)『私をスキーに連れてって』馬場康夫監督，原田知世主演：馬場康夫監督の3部作。ユ

- ーミンの軽快なBGM。スキーブームを作るが、スキーマナーの低下ももたらした。
- 1989(H.01)『彼女が水着に着がえたら』馬場康夫監督、原田知世主演：馬場康夫監督の3部作。湘南サウンド；サザン・オールスターズ。
- 1989(H.01)『YAWARA』吉田一夫監督、浅香唯主演：週間スポーツコミック誌の映画化。天才女子柔道家の活躍青春映画。
- 1989(H.01)『どついたるねん』阪本順治監督、赤井英和主演：浪速のロッキーのボクシング喜劇。
- 1989(H.01)『マイ・フェニックス』西河克己監督、富田靖子・穴戸開主演：日大フェニックスのフットボールチームを舞台にした青春映画。
- 1990(H.02)『バタアシ金魚』松岡錠司監督、筒井道隆主演：高校生の恋愛青春もの。水泳を題材に。
- 1990(H.02)『遙かなる甲子園』大澤豊監督、三浦友和主演：沖縄県立北城聾学校の聴覚障害者達の野球にかける青春映画。
- 1991(H.03)『真夏の地球』井上修監督、菊地健一郎主演：ビーチバレーの青春映画。
- 1991(H.03)『あの夏、いちばん静かな海』北野武監督、真木蔵人主演：豊唾のサーファーたちの恋。
- 1991(H.03)『波の数だけだきしめて』馬場康夫監督、中山美穂主演：馬場康夫監督の3部作。ユーミン・サウンドの若者サーファー文化。
- 1992(H.04)『シコふんじゃった』周防正行監督、本木雅弘主演：低迷する大学相撲部を救うスポーツ・コメディ。
- 1993(H.05)『プロゴルファー織部金次郎』杉村六郎監督、武田鉄矢主演：ゴルフ・ブームの世相を受け、レッスン・プロゴルファーのスポーツ人情喜劇。
- 1994(H.06)『ヒーロー・インタビュー』光野道夫監督、真田広之・鈴木保奈美主演：二軍落ち寸前のヤクルトの選手と新聞社の女性スポーツ記者のラブストーリー。
- 1995(H.07)『人間の翼 最後のキャッチボール』岡本明久監督、東根作寿英主演：名古屋軍石丸進一投手の半生。特攻機で出陣する前のキャッチボール。

注2. 『ロイドの人気者 The Freshman』(Sam Taylor 監督, 1925), ハロルド・ロイド Harold Lloyd 主演。『キートンの大学生 College, 1927』(James W. Home 監督, 1927), バスター・キートン Buster Keaton 主演。この制作年代が正しければ、日本の『我等が若き日』(鈴木健作監督, 1924)の制作の方が早いことになる。なお、映画の表記は『作品名(初出時は原題名付記)』(監督名, 公開西暦年)という形で表記することにする。日本未公開の作品は原題のみ示す。

注3. 『一本刀土俵入り』は片岡千恵蔵が1931(S.6), 1954(S.29)年の2回、長谷川一夫が1934(S.9), 1960(S.354)年の2回、加東大介が1957(S.32)年に1回演じており、合計5回上映されている人気映画である(スタジオ・ジャンプ編、『しこふんじゃった』劇場プログラム, 1992)。

文献 References

- 原 健太郎・長瀧孝二(1995)日本喜劇映画史。NTT出版：東京。
佐藤忠男(1995)日本映画史 1-4。岩波書店：東京。

清水 諭(1989)スポーツ映像論－野球をテーマとした映画の構造分析. 日本体育学会第40回大会発表資料. (unpublished paper)

スタジオ・ジャンプ編(1992)シコふんじやった(映画劇場プログラム). 大映・キャビン: 東京.

田沼雄一(1996)日米野球映画キネマ館. 報知新聞社: 東京.

冬門稔武・柚木 浩(1994)野球映画王. 三一書房: 東京.

塚田嘉信(1980)日本映画史の研究－活動写真渡来前後の事情. 現代書館: 東京.